

# <楊麗雅さんを偲んで>

## 追悼

赤祖父 哲二

はじめて楊麗雅という名前を聞いたとき、いい名前だなと私は思った。現れたのは清楚にして可憐で小柄な女性だった。彼女の日本語の文章はすばらしく訂正の要もなかったし、英語の成績もよく、彼女はめでたく入学した（というより、たしか彼女は政府より推薦された指折りのエリート学生で、入学は当然の大前提だった）。それから、やがて彼女が母国より第二人と呼ばれ驚くべき頑張りを示すにいたって、私はひそかに舌を巻き、最初出会ったときの漠然とした印象——以前どこかで会ったことがある——が、どういう意味であったかわかるようになった。

特定の誰その面影と結びつけたのではなかったのだが、私はかつて日本の若い女性たちがひたむきで、弟や妹たちの面倒をよく見たこと、女性だけでなく若者の多くは貧しかったけれど、己を頼りにしつつ楚々としていたことなど、国敗れて山河なしとなる以前の時代について幻の風景を楊麗雅を通して呼び起こしていたのだ。むろん、これは勝手な思い込みにすぎないといわれるだろう。が、気まぐれの思いつきではなかった。貧しさから脱却しようと欲望丸出しで大切なものまで失おうとする時代のあがきにたいして、私は一貫してひそかな拒否反応を抱きつけてきたからである。おそらく私の原風景というのは、昭和初期か大正時代の静かであるが疲弊した農村風景であり、おそろしく古風で博物館行きなのであるが、これは本稿とは直接のかかわりはないし、楊麗雅ともまったく合致するとはいいがたい幻想にすぎない。だが、その幾分かの一致が大きくふくらんでくるのだ。

今の私には哀しい記憶の断片が浮かんでくる。あるとき私は言葉の端々から彼女が例の文化大革命という集団発作の被害者だったことを知った。これは日本人学生からのまた聞きだったかもしれない。私は政治向きの話は潔癖なほど避けていた。今でもはっきりと覚えているのは、「どうして博士論文のテーマに夏目漱石を選んだのか」にたいする「いちばん政治的でない作家だと思ったからだ」という、口を手で覆った恥ずかしそうな返事であった。これには追い打ちの質問は控えねばならなかった。

彼女が台湾の女子学生といっしょに私の研究室を訪ねてきたことがある。あまりにも仲がよさそうなので、つい私はどうしてなのかとバカなことを聞いてしまった。すると、答えは声をそろえての「政府は一時、民衆は永遠」であり、私は一人で顔を赤らめる思いに追い込まれた。だが、その後、彼女が台湾出身の男子学生と結婚するといひ出し、婚約者といっしょにやってきて何か書類にサインを求められた記憶があるのだが、このときはいささか驚き、かつ心配した。そして、その心配が現実のものとなり、彼女は東京の中国大使館とトラブルを起こす原因を作ることになる。若者の恋路を邪魔するとは何事か、と役人の野暮さかげんを憤ってみたものの、国際政治はそれほど甘くはなかった。私は中国大使館一等書記官なる人物に押しかけられ、博士号を取る見込みがなければ奨学金を打ち切ると、意地の悪い質問というより尋問に悩まされたのだった。それから私は彼女のもちこんでくる五百枚をこえる博士論文の原稿を必死になって読み、細かい指示を出した。自分の文章でもこれほど目を皿にして読んだことはなかった。

奨学金は日本政府より出されていたのだが、支給は中国政府からという形式になっていたようで、彼女は結婚がたたって数百万円の返済を要求され、かなり無理をしたため健康を損ねる結果になったと私は想像している。ああ、何ということだ。棺のなかに横たわって目を閉じていた薄化粧の彼女の顔がどうしても私のまぶたから消えない。

そういう私でも彼女に疑問を抱いたことがある。博士論文がパスした後に彼女はアメリカにしばらく留学する。そのときやってきて二度と中国に帰るつもりはなく、永住は日本かアメリカのどちらでもいいと事もなげにいうのを聞いて、私は「ああ、祖国よ」、ひょっとしたら彼女にとって夏目漱石や日本文学は祖国脱出の手段にすぎなかったのかとひそかに思ったのだった。この疑問はやがて天安門事件のときに氷解することになる。というのは、ちょうどその直前に彼女の両親がやってきて訪ねてきていた。「お子さん三人みな日本に来てしまって寂しくないですか」と私が聞くと、地方党幹部の父親は「人民といっしょにいるから平気です」と模範回答をしてくれたのだが、それはそれとして、びっくりしたのは事件が発生し日本人も息をつめてテレビを見つめているというのに、なかなかの文人でもある（それゆえか文化革命で迫害されたという）父親は悠々と大学図書館で漢籍漁りを楽しんでいることだった。そして、事件が治まってから帰国する。後で聞いた彼女の話によれば、成り行きを見定めるため、念には念を入れてホンコン経由で帰ったこと、彼女も心配でホンコンまで同道したとのことだった。何としたたか(?)であることか。これが人民のほんとうの姿なのかもしれない。

楊麗雅は内剛外柔の見本だったし、万事控え目で私に就職口を探してくれという

そぶりも見せたことはなかった。祖国への帰還を拒否した以上（帰国は結婚生活の解消と籠の鳥を意味した）、日本で働き口を探すことが生活の絶対条件であったのだが、それでも目をぎらぎらさせることなく、いつものように物静かだった。幸い人の好意にすがることができ、彼女の顔は幸福に輝いていた。そのときの控え目な喜びの表情も私は忘れられない。その瞬間、私に初対面の際の印象が蘇ってきた。そうだ、これは昔の日本人がもっていて、今はすっかり失ってしまったものだ。

ある作家、それも老大家が文化大革命に翻弄されたモンゴル人女性とその夫のことを静かな筆致で書いている。この夫は牢獄に何年もぶち込まれ病のあげくに廃人となって故郷モンゴル——天に近い草原と雲のジンギスハーンの国——に戻り、先に中国を脱出して帰っていた妻に抱かれて死ぬ。作家はその女性の長い話を聞き、沈黙と抑えられぬ慟哭の嵐に包まれる。私はこの作品の感想とともに、双子の男子を産むと同時に息絶えた楊麗雅のことを書いて作家に送った。すぐ返事が帰ってきた。そのなかに「理不尽」という文句があった。あえて言葉にすれば、こんな平凡な語にしかないのだが、長い長い沈黙と慟哭でしか応じられない出来事にほかならない。私の耳には今でも彼女の葬儀で彼女の親友の中国人女性が披露した号泣がこびりついて離れないのである。

この中国人女性も日本文学を専攻し、日本のある国立大学につとめていることを私はそのとき知った。もう私は「なぜ日本文学を？」と外国人学生に問うことはしない。それよりも「ニッポン？ Who？ What？」という問いをみずからに向けるようになっている。これが楊麗雅の死から私が学びえた貴重な教訓であった。

## 追　　悼

藤谷　道夫

私が楊さんの訃報を聞いたのはイタリアにおいてでした。私の妻が第二子の出産を控えてイタリアに里帰りしていた為、予定日近くに私もイタリアに行っていたのでした。楊さんの双子出産の予定日は私の妻の一か月後でした。楊さんが亡くなった翌々日、私の妻は男の子を出産しました。悲しみと喜びの交錯する毎日の中で私は自分の子供を見る度、触れる度に、楊さんのことが思い出されてなりませんでした。楊さんは大変な子供好きで、私の長女を大変可愛がってくれ、私の娘を見るのをいつもとても楽しみにしていました。娘を見る時の楊さんの慈しみに満ちた、柔和で楽しそうな顔は今でもよく覚えています。こんなに嬉しそうに子供を見つめる人を私は見たことがなかったからです。楊さん自身も私の娘を見る度に子供を欲しそうにしていましたし、その願望を口にしていました。そして、ようやくその念願がかなった日、子供を出産した時に、自分の子供を見ることも、触れることもなく、楊さんは亡くなったのです。私の妻が息子に乳を与えている姿を見る度に、どうしても楊さんの悲しみを思わないわけにはいきませんでした。様々な長い苦勞の末、やっと仕事も家も手に入れ、国籍の問題も片づいてこれから今までの努力と苦勞が報われる矢先、仕事に花を咲かせ、子供たちが走りよってくる幸福な家庭を迎える矢先であったことを思うと、私の頭や経験などでは、起こった事態を理解することも納得することもできず、ただ徒に私の弱い頭を混乱させるだけで終わってしまうのです。

楊さんの訃報を聞いて以来、すでに5ヶ月が過ぎ去りましたが、未だに私自身この余りに突然の不幸に対して整理がつけられずにいます。（また整理がつくということなどきつとないでしょう。）それほどまでに、楊さんの死は私達に余りに大きな喪失感を与えました。また、彼女について過去形で語るそのことに違和感を覚えずにはいられないのです。何故なら、こうしたことすべてにもかかわらず、私にとっては楊さんが今この時も過去と同じように生きていると感じられるからであり、心の中に毎日のように浮かんできては、時に言葉を交わし合い間柄にあって何ひとつ変わっていないように思えるからです。あの日以来、私はシュレーディンガーの言葉を繰り返し、自分に言い聞かせるようになりました。「自分自身の意識が失われることを嘆くことは決してない。そんなことは永久にないであろう、」と。

楊さんは日本に10年前に筑波大学大学院の文学研究科に留学して来ました。楊さ

んは私の唯一の同級生でもあり、よく一緒に行動しました。最初に、私が驚いたのは彼女の日本語力でした。来日した当初から日本人と話をしているように、言語の障壁はありませんでした。これだけ外国語ができればどんなに良いものかと、羨ましく思い続けてきました。実際、言語に対する能力は天稟のもので、英語も大学院の試験では日本語に訳す問題でありながらも、受験生の中で一番であったと聞きました。後に、楊さんはアメリカのスタンフォード大学に留学しましたが、これも楊さんの英語力が日本語に劣らぬものだったことの証左です。彼女は母国語のように日本語を読んだり、書いたりできましたが、しかし、私達にとっては、楊さんのこうした学問上の才能よりも楊さんというその人を、その人柄を失った悲しみの方が遥かに大きく感じられるのです。この10年間楊さんと一緒にいて私は嫌な思い一つしたことさえありませんでした。いつも楽しかった思い出だけが残っています。このことだけでもいかに彼女が人柄の良い女性であったかが分かります。私達が思い出す楊さんは研究者としても非常に優れた人でしたが、それ以上に心根の優しい、その性格です。気さくでありながらも繊細で、思慮深くありながらも付き合いのよい楊さんを私達はいつまでも懐かしく思い出さずにはいられないのです。

大学院の最初の3年間はいつもよく会っては行動を共にし、時には夜遅くまで楊さんの部屋に御邪魔して長い間おしゃべりをしていました。そうした会話の中でも忘れることのできない、私の心に後悔の念としていつまでも残る話があります。季節は夏の終わり頃でしょうか、私達は日本のお盆の習慣について話していました。日本人全体が列島を大移動するお盆のことが楊さんには不思議に思えたようで、そのことから彼女はこんな日中の比較をしたことがありました。「日本人はお盆の時だけ帰省し、それ以外の時は滅多に帰省しないけれども、何故日本人は死んだ後の方を大切にするのでしょうか？中国では生きている時にみんなで老人をお祝いして、できるだけ一緒にいようとします。墓参りの帰省よりも、生きている時にこそ頻繁に帰省して会い、生きている間の方を大切にします」と。私は楊さんのこの考え方になるほどとは思いますが、この考えを実行するに至ることなく今まで生活してきました。そして、今となってはこの考えを痛いほど知らされることになったのです。しかも、他ならぬ楊さんの死に接して初めて分かったのですから、最大の皮肉でもあり、自分の愚鈍さを嫌というほど思い知らされました。楊さんと兄弟のような付き合いでもあり、友人として一生付き合えるという思いから、今できることも将来、将来と伸ばしてきていたのです。楊さんが妊娠してから一度会ったきりで、楊さんのその後の状態を電話で尋ねてみることもなく、入院していたことも知らなかったのですから。将来友達として、いろんなことをしてみようという計画だけが空しく宙に浮いたまま、もっと何かできたのではないかと後悔の念ばかりが先に

立ってしまいました。それで、この話ばかりがとりわけ今では繰り返し思い出されてしまうのです。

また数多くの思い出の中でも、私が風邪を引いて寝込んでいる時には見舞いにくれてくれたり、食事をもってきてくれたりと楊さんの優しい心遣いを忘れることはできません。何度中国料理を作ってもらったことか、それは私ばかりだけでなく、楊さんと友達になった人は誰でもこの手料理の味を知っているはずです。中国の歌を録音してくれたり、中国の踊りを披露してくれたりと自分にできること何でも喜んでやってくれていました。楊さんはそういう人でした。私は筑波にいる時はいつものように彼女に会っていましたから、その当時の私の生活すべてに彼女の面影、思い出が分かち難く染み込んでいますが、今楊さんとの思い出をここで一つ一つ挙げていこうとは思いません。それはとても短い紙数では尽きさせませんし、思いでは単なる出来事というよりもその時の外界と内界の状態すべての記憶の総和ですから、とても私の言葉ではうまく語り得ないのです。それで、最後に、今私が感じていることを一つだけ述べさせてもらうに留めたいと思います。

愛する人——肉親や親しい友——を失うということは自分自身の心の一部を失うということと同義です。人が肉親や親しい友といった“特定の人”を愛するようになるということは、自分の心を相手の心の中に流入させることであり、相手の心が自分の心の中に入り込んで来て、自分の心の中に相手の心が場所を占めるということです。それ故、愛する人が死ぬということは、自身の心の一部を失うことであり、自身の心の一部も死ぬということです。こうして人は多くの死を経験することで、自身も少しづつ死へ近付いて行くのでしょう。私は自分の心の中で何かが崩れ落ち、割れる音がしたのを聞いたように感じられました。